



吉川英梨

銀座のギャラリーにて、米田堅持氏の海上保安庁写真を堪能したあと、初めて、海上保安協会にお邪魔することになりました。

宮野直昭常務の執務室にて、海上保安友の会の沿革と理事の仕事について、説明を受けました。ただ、真面目に理事職務の話をしていたのは、たぶん5分くらい(笑)。宮野氏がおもむろに立ち上がりました。

「吉川さんに見せたいものがあるんだよー」

なにやらボロボロになった封筒筒を取り出し、クリップ止めされた分厚い文書を見せてくれました。

特救隊が経験した「米原子力潜水艦の謎」

「これ、例の本のボツ原稿」
成山堂から出ている『海上保安庁特殊救難隊』の編纂過程で掲載されなかった大量のお宝文書だったのです！ この本は拙著、新東京水上警察シリーズ第4作目『海底の道化師』で大いに参考にさせていただいた一冊です。現役やOBの特殊救難隊員の方々の寄稿で成り立っています。

「すべて隊員の生の経験談だけど、出版社の編集方針に沿わなかったのかなあ……」

と、宮野さん。どれどれとページを捲った私の目についたのが、とある隊員の方が記した『米原子力潜水艦から急患輸送』というトム・クランシーの小説みたいな文言でした。

発端は外務省からの急患輸送要請。どの船かと思えば、米原子力潜水艦……。しかし、いざ出動してみると、その急患を名乗る米兵は自ら縄梯子を降りる

宮野常務がツイッターにアップした『海蝶』と2018年当時のサイン



し、会話もできる。症状を聞くとお腹が痛い」、状況を聞き

続けるとダンマリ……。読めば読むほど、不可解極ま

りない事案です。これのどこが急患？ そしてなにか不可思議な荷物を肌身離さず持っていたとかいないとか!?

ここの真相はわかりません。そこがまた、作家の性をくすぐるのです。機密のなにかを大至急米本土へ持ち込まなくてはいけなかったのではないか。某国のスパイだったのではないか……。想像力をかきたてられ、妄想が止まりません。

「うわー、コレ書きたい！」
この原稿の束はいまでも私の宝物として、大切に書斎の棚に保管されています。

『海蝶』は、等身大の女性の成長物語なので、米原子力潜水艦が登場するようなダイナミックな話は書けませんでした。いつかどこかの物語で、米原子力潜水艦からの不可思議な救難要請……書くことがあるかもしれません。

いや、絶対、書きたい！
(つづく)

寄稿の束は宝物「うわー、コレ書きたい！」